

ひとみは女の子か？

坂本伊都子・作 桜井 誠・画



ひとみは女の子か？

本伊都子 作
桜井 誠画



童心社

ひとみは女の子か？

1976年12月15日 第1刷発行

作者・坂本伊都子 ©

画家・桜井 誠 ©

発行所・株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話・03 (357) 4181 (代表)

振替・東京 75504

活版・新興印刷製本株式会社

平版・新興印刷製本株式会社

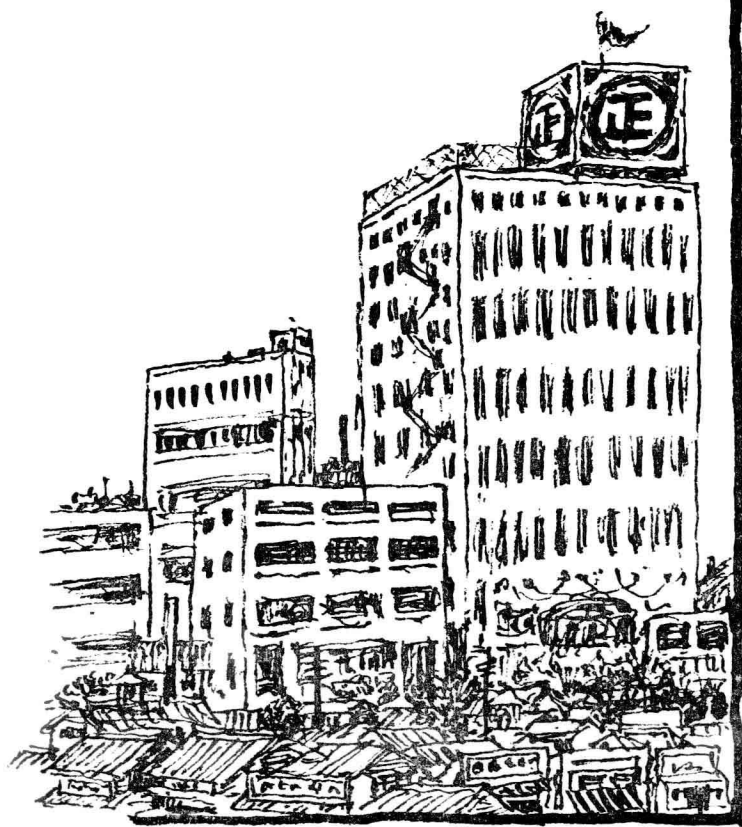
製本・文勇堂製本工業株式会社

NDC 913/© 1976/272p/21.6×17.6cm

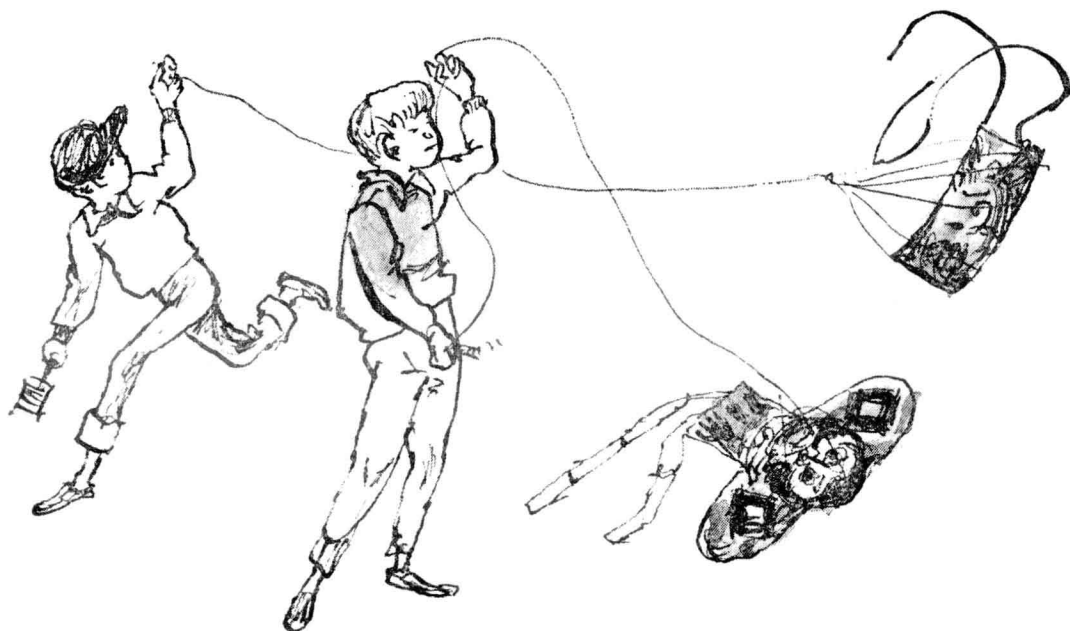
Printed in Japan

8393-460311-5253

もくじ



11	ゆびきりげんまん……………	242
9	けが？……………	196
10	仙人はだれ……………	219
8	冬の花氷……………	170
7	賢一はおとな……………	146
6	ラデッキー・マーチ……………	125
5	あらしだ、それっ！……………	105
4	山は呼ぶ……………	81
3	目には目を……………	56
2	ひとみは女の子か？……………	30
1	つり橋の誓い……………	7







装丁・さしえ
桜井 誠

ひとみは女の子か？



1 つり橋の誓い



杉山ひとみは、へみどりのつり橋のなかほどに立ちどまった。六年生になって、三日目の帰り道である。

ゆうべの春あらしが、満開だったさくらをみるかげもなくちらせ、ひとみの足もとにも、花びらがおちこぼれている。水面近くさしのべたさくらの枝には、もう黄みどり色の若葉の新芽が光っている。

（ひどいひどい。こんどの先生ったらあんまりよ。）

ひとみは、ランドセルをゆすりあげると、両手をひろげた。左右の手すりのロープをつかみ、おもしろい、つり橋を前後にゆすりはじめる。

ユラユラ グラグラグラッ

橋いたは、波うっておどります。

このへみどりのつり橋は、国電の京浜東北線、王子駅の真下を流れる石神井川にかかっている。

石神井川は、川は十一、二メートル。練馬区の三宝寺池から、ながれでいると、思われているが、ほんとうの水源は、武蔵野のおくである。板橋区を横断し、北区をくぐりぬけて、足立区と接するところで、隅田川（荒川）に合流し、東京湾へとそそいでいる。

北区は、上野、日暮里からつづく、王子、飛鳥山の丘陵性武蔵野台地、つまり、西側の山の手台地と、東側下町低地帯とに、はっきりわかれていて、そのさかい目に王子駅があり、山の手台地をおしわけ、谷川となつてながれる石神井川。つり橋は、駅から西へ、五百メートルほどの谷間にかかっている橋である。

むかしこの谷あいには、江戸市民のいこの場所として、料亭がたちならんでいた。飛鳥山のさくら、王子神社、王子稲荷への信仰のほかに、川岸の景色の美しさ人をびとは愛したのであろう。そして、つるがとび、がんがわたった。そのころの石神井川の水は、現在の姿からは考えつけないほど、きよらかにすんでいたのだ。まだ、陽ののぼらない早朝、りようしたちは流し釣りをし、とれたこい、うなぎ、うぐいなどは、その日のうちに料亭の座敷にならぶ、メイン料理となつたのである。また、明治期になって、製紙工場、大蔵省印刷局などができたのも、美しい石神井川の水を、利用するためだったのである。

当時のおもかげは、いま、つり橋の周辺にのこるだけである。

東京につり橋があるのもめずらしいなら、温泉がわいているのもめずらしい。

以前つり橋のたもとは、ハクボク工場がたっていた。たびたびの石神井川のはんらんになやまされていたところ、とつぜん、工場内での出水さわぎ。



「水じゃあない。お湯だぞ。」

「すごい。お湯なら、温泉よ。」

「まさか。東京に温泉などわくものか。」

そのまさかが、ほんとうになった。

東京都衛生研究所の分析によって、『天然湧出炭酸鉄泉』であるという証明がなされた。昭和二十六年のことである。

ハクボク工場は、たちまち石神井温泉旅館に変身した。リュウマチ、皮膚病、貧血、神経衰弱、ヒステリーなどにきくということで、一時はたいへんに繁盛したという。

下町低地帯は六、七十年以前は農地で、荒川がはらんするたび、水をかぶった。

だが大正時代に、岩淵水門ができて以来、王子地区まで水がおしよせてくることは、なくなった。けれど荒川の洪水ほど大規模ではなくても、石神井川のはんらんは、たびたびくりかえされてきた。その石神井川のはんらん原因の一つに、かぞえきれないほどの、川筋のカーブがある。右にまがり左におれ、くねくねとしたカーブは、あらしなどによる増水のながれをさまたげている。

ことにこの場所では、温泉旅館を中心に西から東へ、大きく南まわりの半円をかき、半円の内側部分は、周辺からいちだんと低くおちくぼんでいる。温泉のほかに、民家が数軒あり、つり橋はその半円のおわり近く、東西のむきにかかっているのだ。

半円の外側は、水面から十メートルほどの高さのがけで、内側は四メートルぐらい。つり橋はその四メートル高さで、川をまたいでいる。

ひとみは、橋をゆするのをやめると、くるとあたりをみまわす。

橋のたもとの大いちょう。土手^{どて}に根をはっている何本ものけやき。大きな立木^{たちぎ}は、ほとんどまだはだかにみえる。よくよくみれば、枝のさが黄ばんできているのだが。かしのき、やつでなどのときわ木も、ほこりつぽくくすんでいる。

さくらがばつとひらいたときは、水の上まではなやかな春だったが、いまは、えにしたので黄いろい花、とおくにみえるはくもくれんだけがいろどりで、まだまださびしい風景^{ふうけい}である。

(でも、あたしはここがすき。だって、つり橋にこうして立っていると、山^{やま}おくにいるような気がしてくるもの。)

ひとみはまんぞくげに、北側の木立^{こだち}の上にのぞく区役所^{くやくしよ}、便郵局^{ゆうびんきょく}のビルにも、目をほそめる。

(黒っぽい建物^{たてもの}だから、あれは、とおくの山々とおもえばいいんだわ。)

南から西へかけては、ふつうの民家^{みんか}ばかりで、木立のあいだからちらちらみえるけど、あれもやがて、みどりがこんもりしげれば、かくれてしまう。東よりの、むかし、もみじの名所^{めいしょ}だったのもみじ園^{えん}のあとは、中学校である。それも木立ちのかけで、ここからはみえない。

「ちょっと、おしりをへっこませてくれよ。」

ひとみはとっさに、なにをいわれたのかよくわからなかった。

「通^{とお}してくれって、いつてるんだよ。」

こんどははっきりと、耳にはいった。

(なんだ、かつてに通ればいいのに。)

ひとみは、知らん顔。つり橋はせまい。手すりのロープに、腕をのせあごをもたせ、おしりをつきだして、さっきから交通妨害をしているくせに。

「でっかい、しりだなあ。」

三度目にそういわれて、むっとした。しぶしぶ腰をのばし、よこ目でにらみつける。高校生ぐらいの青年が、自転車をひいていた。

「もっと、どけないのかなあ。」

(なんて、もんくの多いやつだろう。)

ひとみはあきれた。だが、どいたつもりでも、まだランドセルがつきでいたのである。

青年は、やつこらさと自転車を、温泉側の橋のたもとにはこぶと、大きな声ではなしかけてきた。

「おい、おまえ、いそうろうだろ。」

「えっ。」

ひとみは、あっけにとられた。

「おれもいそうろうさ。だからわかるよ。おまえ家へはやく帰るのがいやで、さっきから、みちくさくってるんだろ。」

「ええっ。」

(へんなやつ。でも、すごいのはねえ。)

ひとみは、じろじろっと青年を、上から下までさぐるようにながめまわす。

みられて青年は、にこっとした。

「おまえ小学生か。それとも、中学生もランドセルしょうのか、東京では。」

自転車を置いて、近よってきた。

ひとみのあだなは、ジャンボ。のびのび育^{そだ}った身長^{しんちよう}が、百六十一センチ、五十三キロ。バストは七十八、ウエスト六十八、ヒップ八十八。バストの小さいこと、ウエストのしまっていないことが、子どもの証^{しょうこ}拠である。

うっつりと、あたりの景色^{けしき}にみとれていた気分をこわされ、ひとみはつつけんどん。

「フン。わるかったわね。でっかい小学生で。」

いいながらひとみは、あとずさる。知らない人間にはなしかけられたら、用心しないではいけない。チカン？　かもしれないから。

「おれな、この三月、いなかからでてきたばかりだけど、東京ってへんなどこだね。こんなとこに、つり橋や温泉がある。そして、でっかい小学生が、さっきからじっと、川のなかをのぞいているから、心配してたんだ。」

彼は、ひとみがあとずさっているのに、へいきで近よってくる。

「はじめは、そのでっかいおしりのうしろを、どうやって通りぬけたものかと考えていた。おまえが歩きたすまで、まつつもりだったけど、もしか自殺^{じきつ}じゃないかと気になって。」

（ぎゃっ。あたしが自殺だなんて……。）

ひとみは、とびあがりそうになった。だが、すぐげらげらわらいだす。

「ばっか。へんなのは東京ではなく、あんたのあたまよ。」

「わらったな。自殺じゃなかったのか。じゃあおれ、早合点しちゃったのか。大学受験に失敗して、おれも自殺したいような心境だから。けど、おまえがとびこんだら、どうしようかとしんけんに心配してたんだぞ。おれ、およげないから、たすけられないものな。」

「いやーだ。あんまりわらわせないでよ。」

ひとみは、なおもげらげらわらう。

「わらいすぎて、ほら、涙がでちゃった。」

「へーえ、女の子ってかわいいね。わらっても涙がでるんだな。」

ひとみがこんどは、早合点でよろこんだ。

「えっ、あたしがかわいい女の子。やーだ、おせじなんかいつて。」

物心がついて以来、両親以外の口から、かわいらしいとは、いわれたおぼえのないひとみである。

「あたしのあだな、ジャンボよ。それでもかわいい？」

「ぶっ！ あっはっはっはっ。」

こんどは、青年がわらいだした。ききーっとひとみの目がつりあがる。

「失礼ね、フンだ。」

背をむけて帰ろうとした。

「あ、まてよ。」

青年は、ずうずうしくひきとめる。